

日本語指導が必要な児童生徒にオンライン支援が行える 大学生サポーターの養成

入山美保（筑波大学）・井上里鶴（つくばにほんごサポート）
澤田浩子（筑波大学）・松崎寛（筑波大学）

要 旨

本稿では、日本語指導が必要な児童生徒へのオンライン支援が行える人材を養成するカリキュラムを通して、履修生にどのような学びが見られたかを報告する。カリキュラム開発にあたっては、特に、①児童生徒に寄り添う態度、②日本語学習・教科学習それぞれの学習目標を組み立てる力、③オンラインでのやりとりを工夫する技術、の3点を重視した。これらを意識化させる「授業デザインシート」を導入し、主体的活動が求められるグループワークを多用し、最後に、算数の模擬授業を行わせて意見交換を行った。履修生25名のミニレポート、デザインシートおよび模擬授業、受講後アンケート等を分析した結果、①については、「大学生サポーターの役割の理解」が、②は、「学習目標を意識したデザインシートの作成・実演ができる力」が、③は、「オンラインでの支援に必要な基礎知識と方法の習得」が進んだことがわかった。

【キーワード】 日本語指導が必要な児童生徒 オンライン支援 支援者
養成カリキュラム

1. はじめに

文部科学省の「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成30年度）」によると、茨城県において日本語指導が必要な児童生徒は外国籍・日本国籍あわせて1,449人となっている。茨城県教育委員会は外国人集住地域の小中学校を中心に日本語指導担当の加配教員の配置を進めているが、およそ3分の1に当たる約500人が依然として、日本語指導担当教員の加配がない小中学校に在籍しているなど、必要な日本語指導が受けられる環境にないのが現状である。このような児童生徒に対して、ボランティアとして日本語支援活動に携わりたいと考える大学生は多いが、外国人散在地域への物理的移動手段・移動時間がネックとなり、これまで支援活動が行えないという課題があった。

そこで、これを解決する一つの方策として、筆者らは茨城県教育委員会が実施する「グローバル・サポート事業（令和元～3年）」の委託を受けて、大学生によるインターネットを用いた遠隔での日本語学習支援を行うこととなった。我々はこの支援活動を大学における正規の授業科目として位置づけ、令和2（2020）年度に茨城県内2

自治体の2中学校9名の生徒に対して、大学生がオンラインによる日本語支援を行った。

日本語指導が必要な児童生徒は、全国の散在地域に数多く存在し、今後さらに増加するものと考えられる。本稿は、そのような児童生徒に対する「オンラインによる日本語学習支援」ができる人材（以下、大学生サポーター）を養成するためのカリキュラム開発の概要やその成果、履修生の意識について報告し、同様のオンライン日本語支援を導入したいと考えている地域社会に対して、その一助となることを期待するものである。

2. 大学生サポーター養成カリキュラムについて

2. 1. カリキュラムの概要

大学生サポーター養成カリキュラムである「外国人児童生徒支援研究」は、遠隔散在地域の児童生徒に対して、オンラインでの日本語学習支援を行う実践力を身に付けるための科目である。オンライン日本語支援実習科目の履修を希望する学生は、この履修が義務付けられている。

『平成29年度文部科学省委託「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修プログラム開発事業」－報告書－』（日本語教育学会 2018）や『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改訂版』（文化審議会国語分科会 2019）を参考に、全10回（1週＝75分×2回）計12.5時間のカリキュラムを作成した。

これまでの教員養成や研修プログラムのカリキュラムは、対面で行うことを前提とされていたが、本稿で報告するカリキュラムは、オンライン日本語支援の実践を念頭に置いた講義科目をオンラインで実施するためのものである。古川（2018）をはじめ、日本語支援について扱っている実習や研修は多いが、日本語と教科支援の両方を念頭においたものは少ない。文部科学省（2019）では、取り出し指導における基本的な指導内容・指導方法として「サバイバル日本語」「基礎日本語」「技能別日本語」「日本語と教科の統合学習」「教科の補習」の5つのプログラムを挙げている。この科目では、実際にオンラインでの日本語学習支援を行う生徒に必要な「基礎日本語」「技能別日本語」「日本語と教科の統合学習」の3つを取り上げ、Can-doに基づいた日本語や教科の学習目標を立て、オンラインで求められる効果的な教授技術も身に付けられるようにした。

2020年度春学期の履修者は25名で、そのうち19名が教員免許取得を目指している。中川他（2015）でも外国人散在地域の学校現場で日本語指導ができる教員の不足が指摘されているが、大学卒業後、日本語指導ができる即戦力になれるよう、より実践的な内容になるようにカリキュラムを作成した（表1）。

表1 カリキュラムの概要

回	タイトル	概要
第1回 第2回	・オリエンテーション ・サポーターの役割を考える①	授業の目的・概要、茨城県グローバル・サポート事業の概要の説明。 小学校の取り出し支援ボランティアの対談動画（約30分）を見て、グループで話し合う。ミニレポート①
第3回 第4回	・サポーターの役割を考える② ・サポーターの役割を考える③	夜間中学の数学教員の対談動画（約30分）を見て、グループで話し合う。 オンラインで日本語および教科支援を行うNPO団体所属の講師の対談動画（約30分）を見て、グループで話し合う。ミニレポート②③
第5回 第6回	・やさしい日本語を意識した授業デザイン ・実践に向けて①	やさしい日本語の導入。オンラインで日本語・教科支援を行うNPO団体所属の講師による算数（たし算の文章題）の授業体験。 授業デザインシートの提示・説明。その後、体験した授業を授業デザインシートに落とし込む作業をグループで行う。グループ課題①
第7回 第8回	・実践に向けて② ・実践に向けて③	8つのグループに分かれ、50分間の授業デザインを考える（かけ算の文章題、わり算の文章題、時間と時刻の文章題、円と球の文章題および作図）。 学生・相互および教員のフィードバック。グループ課題②
第9回 第10回	・支援実演 ・本授業の総括	教材・教具の作成と実演。 支援者役と児童役になり、グループで10分間の実演。 オンラインで日本語・教科支援を行うNPO団体所属の講師によるフィードバック、学生・相互および教員のフィードバック。グループ課題③、および最終課題（個人課題）

カリキュラム全体を通して、次の①～③を養成するねらいを立てた。①児童生徒に寄り添う態度、②日本語学習・教科学習それぞれの学習目標を組み立てる力、③オンラインでのやりとりを工夫する技術、である。

カリキュラム開発では、小学校の取り出し支援ボランティア、夜間中学の数学教員、オンラインで日本語および教科支援を行うNPO団体所属の講師の協力により対談動画（各30分程度）を作成するなど、多くの地域人材の協力を得た。また、カリキュラムの最終回には、学生が支援者役になって実演をする機会を設けた。

2. 2. 課題内容

本カリキュラムでは、日本語と教科の統合を目指した支援もできるよう、「算数の文章題」の50分間の授業デザインシートの作成および10分間の実演を取り入れた。

小池・古川（2019）が外国人児童生徒等の日本語指導に関して自主的・主体的な研修活動が求められていると指摘していることから、グループワークを中心とした。履

修生が初めから一人で授業デザインシートを書くのはハードルが高いが、グループで取り組むことで、多様な教え方を知り、取り組みやすくなる。各回の課題は易→難の順に提示した。各単元について問題は3題あるが、表2では1題のみ紹介する。

表2 算数の課題内容

かけ算	1箱5個入りのキャラメルが7箱あります。キャラメルはいくつあるでしょう。
わり算	おり紙が40枚あります。1人に8枚ずつ配ると、何人に分けられますか。
時間と時刻	ジェットコースターの列に10時25分からならんで、乗れたのは10時52分でした。何分ならびましたか？
円と球	コンパスを使って、次の円をかきなさい。 ・半径が2cmの円・直径が3cmの円
最終課題 (個人)面積	たてが22m、横が12mの長方形のバスケットボールのコートがあります。コートは面積は何㎡ですか。

最終課題では、事前に履修者に「日本語のポイントを整理できているか」「教科学習のポイントを整理できているか」「オンラインを意識して具体的に考えられているか」「全体の流れを意識できているか」の4つの観点で評価することを提示し、日本語の習得状況、算数の学習歴、オンライン特有の配慮を意識させた。

3. 本養成カリキュラムを通して養成できたもの

学生25名のミニレポート3回分、グループで作成した実演用の授業デザインシートおよび動画データ、最終課題の授業デザインシートを分析の材料とした。文部科学省(2019)のJSLカリキュラムにおける日本語支援の3つの考え方「日本語の力や学力の個人差に対応した支援」「日本語の力の発達に合わせた支援」「考える力を育成する支援」を前提として、5つの支援の視点「理解」「表現」「記憶」「自律」「情意」が盛り込まれているかを授業担当教員、専門指導員、NPO団体所属教員の三者で分析した。その結果、カリキュラムの3つのねらい、①児童生徒に寄り添う態度、②日本語学習・教科学習それぞれの学習目標を組み立てる力、③オンラインでのやりとりを工夫する技術、は概ね達成でき、①は「大学生サポーターの役割の理解」が、②は「日本語学習・教科学習それぞれの学習目標を意識した授業デザインシートの作成および実演ができる力」が、③は「オンラインでの日本語支援に必要な基礎知識と方法の習得」が養成できていることがわかった。

3. 1. 大学生サポーターの役割の理解

カリキュラム前半の「サポーターの役割を考える①～③」では、3本の対談動画(表1参照)を視聴後、グループでの話し合いを行った。その後のミニレポートにおいて学生が日本語サポーターの役割について記述したものを一部挙げる。

【小学校の取り出し支援ボランティアの話を聞いて】

- ・外国につながる子どもと信頼関係を築き精神的、言語技術的にもサポートする窓口となりながら、他の分野（学校教員、心理カウンセラー、地域市民など）とのつながりの中で連携しながら包括的な支援を調節し実践するという役割。
- ・日本語支援の際に気を付けるとして挙げられていた「日本、日本人、日本語を嫌いにさせない」ということはとても大切だと感じている。まずは、信頼できる日本人、好きな日本人になることが、日本語支援サポーターの役割なのではないかと感じた。

【夜間中学の数学教員の話を聞いて】

- ・夜間中学校では日本語を教える専門家がないため、各教師は手探りの状態で日本語を教えている。そのため、ここでの日本語サポーターは、生徒と同じ目線にたって一緒に問題を解決する、教えるのではなく、手助けをするという役割。
- ・日本語指導と教科学習の結びつきがあると思った。日本語を教える中で授業との関連も考えていく必要があり、どこでつまずいてしまうのか、教科を学ぶためにどんな日本語を学ぶ必要があるのかなども考えていくべきだと思った。

【NPO 団体所属の講師の話を聞いて】

- ・「自尊心に配慮」することはとても重要な事だ。子どもたちの個性を尊重し、心身ともに傷つけないように配慮することが、まず優先されるべき事項だと考えた。オンラインでも対面でも安心して学習できる環境を提供することや、子供の特性を考慮して適切な声掛けをしたり、やることを明確にしてあげるなど、必要と思われることを前もって予想することもサポーターの役割の一つだと考える。
- ・生徒個人の特性や授業の理解度、現在の環境や状況などを細やかに見ていくことだと思った。オンライン授業によってコミュニケーションに制限がかかる以上、余計に教師の側がアンテナを高くしてアプローチを丁寧に行っていく必要性を感じた。またそのためにも授業計画をしっかりと立てて授業内容ではなく生徒に目を向ける余裕を作り出すことが大事であると思えた。オンライン授業は対面授業とはまた異なる授業のコツがあるので、それらをしっかりと盛り込んだ計画を作って臨むことが大事だと思った。

これらの意見から、大学生サポーターが小学校取り出し支援、夜間中学、NPO 団体のオンライン授業の現場を知り、大学生サポーターとしてどのように児童生徒に寄り添うべきかについての態度を養成できたことがわかる。

3. 2. 日本語学習・教科学習それぞれの学習目標を意識した授業デザインシートの作成および実演ができる力

授業デザインシートの作成にあたり、支援対象者の具体的な設定（表3）を示し、児童生徒に寄り添う支援について考えるきっかけを与えた。

表3 デザインシート作成における支援対象児童の設定

名 前：ジュン	日本語の習得状況：生活言語○、学習言語×、漢字△
学 年：4年生	算数の学習の様子：算数の時間は楽しそうにしている。国
来日歴：約半年	で日本の2年生までの学習はしてきて
ルーツ：ブラジル	いる。
母 語：ポルトガル語	オンライン授業経験：なし

本カリキュラムの3つのねらいを反映させた授業デザインシートの構成は、表4のようになっている。上段には、扱う単元と問題に沿った「学習目標【日本語】」「学習目標【算数】」をCan-do形式で記入する。下段には、オンラインを想定した「サポーターの活動」「児童の活動」「教具・使用ツール」等を時系列に沿って書く。

4つの算数の単元の中でも「円と球」の課題は、コンパスで円や図形を作成するといった、対面でも説明が難しい内容である。実際の課題に取り組む前に単位の確認、「円」「球」は何なのかという概念の説明から始めた、優れたグループがあったので、一部を示す。

母国や滞在国の学校教育カリキュラムによって算数の学習歴が異なることから、どの程度の理解力、知識があるのか確認しながら進めている。問題文を解くにあたり必要な日本語力も丁寧に確認している。これらのことから、日本語学習・教科学習それぞれの学習目標を組み立てる力が身に付いていることがわかる。

3. 3. オンラインでの日本語支援に必要な基礎知識と方法の習得

実演ではどのグループも、事前の講師の講義や算数の授業体験で学んだ知識を活かして、取り入れていた。

「かけ算」グループでは、問題文を理解するためのポルトガル語訳や九九の表を準備する、アニメーションを使ってキャラメルを増やす、計算式を易→難の順で立てさせる、などの工夫をしていた。

「わり算」グループでは、問題文の折り紙や花束の実物を準備したり、九九を知っているか確認したりした上で、検算の仕方を文字の色を変えて説明していた。

「時間と時刻」グループでは、課題内容を写真1のようにスライドに視覚的にまとめ、ジェットコースターに乗るまでに何分並んだかをわかりやすく説明していた。

表4 日本語と算数「円と球」の学習目標：授業デザインシートより抜粋

学習目標 【日本語】	<input type="checkbox"/> 「半径」「直径」「円」「球」「コンパス」「中心」などの円と球に関連した語句の意味が理解できる <input type="checkbox"/> 「ぴったりと」「同じもよう」「れつ」「しまう」などの単語が理解できる <input type="checkbox"/> 文章題の意図が理解できる
学習目標 【算数】	<input type="checkbox"/> コンパスの使い方を知る、慣れる <input type="checkbox"/> 定規の目盛りが読める <input type="checkbox"/> 「半径」「直径」などの算数用語が理解できる <input type="checkbox"/> 「円」と「球」の定義を理解する <input type="checkbox"/> 「cm」の単位が理解できる

確認する項目	サポーターの活動 (確認する内容と方法)	児童の活動	教具・使用ツール
問題文を解くために必要な知識の確認	<ul style="list-style-type: none"> ・ mm, cm, m の長さの認識が合っているかを確認する。パワーポイントに米つぶ、鉛筆、プールのイラストを出し、これらの長さを表すときにどの単位を使うか聞く。同時にそれらの物の名前を確認する。 ・ 「単位」という言葉について、漢字と意味を正確に理解できているか確認する。 ・ 円と球の違いを確認する。円はパワーポイントで図を見せ、球は実際にボールを見せる。 ・ パワーポイントで図を示しながら「半径」「直径」「円の中心」の用語と、それが何を指すのかを確認する。また、半径を教える際は、半径が直径の半分であることを教える。このとき、「直径」「円の中心」を復習する(先生が質問、児童が答えるという形)。 ・ 「半円」と「直径が円を半分にすること」を理解させる。また「半分」が2等分と同じ意味であるということを教える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 単位 (mm, cm, m)、物の名前など聞かれたことに答える。 ・ 「単位」が物の量を表す基準になるということを理解する。 ・ 説明を聞く。 ・ 説明を聞き、先生の質問に答える。例えば先生が円の中心を指したら、中心と答える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ スライド (米つぶ、鉛筆、プールのイラスト) ・ スライド (円や球の図)、円形のもの、本物のボール ・ スライドに円、半円、半径、直径、中心を、それぞれ異なる色を用いて示す。用語にはルビを振る。

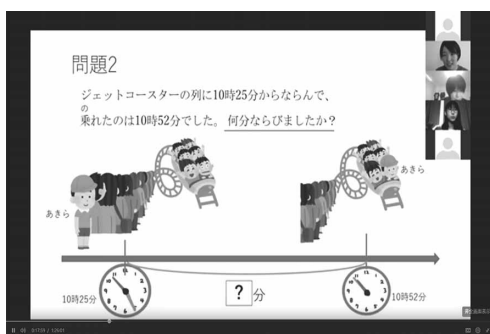


写真1 「時間と時刻」のスライド



写真2 「円と球」の教具

「円と球」グループでは、日本語の学習目標の1つである「ぴったりと」の意味を理解させるために、「ぴったり閉まった窓」「ぴったり箱に入ったボール」と「隙間が開いた窓」「箱より小さいボール」の写真を対比させて確認していた。また、算数の学習目標である「コンパスの使い方」を教えるために、説明書きと写真の他に、手元カメラを使って、学生がコンパスを使う様子を見せるというオンラインならではの工夫が見られた。コンパスを使って同じ模様を書く課題に取り組むために、写真2のような教具を作成し、児童の理解を促していた。

これらのことから、対面とは異なるオンライン特有の工夫を凝らした教材・教具を準備していることがわかる。

3. 4. 本養成カリキュラムでの成果

受講後アンケートでの履修者の意見は、以下のものであった。

3. 4. 1. 授業デザインシートをもとにした実演について

- ・実践に際しては、まさしくオンライン環境が絶大な効果を及ぼしている。オンラインで模擬授業を行わざるを得ない状況であったことが、実演のリアリティを強化した。
- ・上手くできたという実感を得たというよりは、実際にオンラインで実演することで、画面操作など教案を考える際に気づけていなかった盲点があった。また、他の組の発表を数種類見れたことにより、指導の工夫を見つけて自分が行った授業の反省点を考えることができた。
- ・オンライン授業を受ける側だけでなく、やる側の体験もできたのは非常に有意義だった。実際に準備をして、何度かリハーサルをすることで、ホワイトボードの文字が反転してしまう問題や光を反射して読みにくくなる問題にも気付くことができた。また発表の際にカメラが故障してしまったのは非常に残念だったが、これは先生側にも生徒側にも起こりうることであり、臨機応変に対応できるような授業デザインや準備が必要だと実感することができた。

これらから、本養成カリキュラムも実演もオンラインで実施したことで、実際の支援に即した環境による気付きが多くなったことがわかる。

グループワークを通して、児童からの見え方を確認する入念なりハーサルや、実演時の声かけ、文字だけでなくイラストや図などの視覚情報を豊富に取り入れたスライドの作成、スライドの画面共有だけでなく板書や実物などの動きのある構成など、様々な工夫が見られた。児童とのやりとりでは、やさしい日本語を意識した説明や指示出し、児童が書いたものは画面に映して一緒に確認、笑顔で語りかけるなど、安心して参加できる環境づくりをしていた。

特に、実演で支援対象として想定した児童の状況に寄り添う態度が支援内容に見られた。例えば、児童にとって身近な「ボンデケージョ（ブラジルのパン）」を友達に分けるという設定で、わり算の概念を導入するなどの例が見られた。また、児童が「算数の時間は楽しそうにしている」ことから、最初から学生が一方的に説明するのではなく、問いかけたり計算させてみたりしながら、どこまでわかっているかを確認していた。すでにわかっていた場合の対応（チャレンジ問題を用意しておく）、わかっていた場合の対応（概念から丁寧に説明する）など、様々な場合を想定して準備できていた。

3. 4. 2. 教員からのフィードバックや受講者間の意見交換について

教員からのフィードバックは、実演終了直後に口頭で行ったが、履修生同士の意見交換は、同じ文章題を担当したもう一つのグループがチャットに書き込み、全員が即時に見られるようにした。

- ・ 受講者間の意見交換について、対面だと話すときに緊張したりうまくまとめられないと感じることが多いが、オンライン授業によりチャットでの意見記入などはやりやすく感じた。
- ・ グループの中では気づかなかった視点から意見を頂くことができ、より多角的に自分たちの活動を振り返れた。他のグループに対しての意見も読んで、自分が気づかなかった視点の意見もあって勉強になった。フィードバックや意見交換が誰にでも見れる形で行われていたために上記のようなことが可能になったので、こういう形式は良かったと思います。
- ・ いろいろな所属や学年の受講者と話し合うことで、自分にはなかった考えにたくさん触れることができた。はじめのうちはオンラインであったがゆえに、話し始めるタイミングや順番がつかめず発言しにくかったが、ある程度慣れてくるとスムーズに話し合いができるようになった。オンラインで授業する際にも、生徒が慣れて自然に発言してくれるようになるまで少し時間が必要なのではないかと感じた。また、授業デザインシートを複数人で作成したことでより深く検討することが可能であり、非常に有意義だった。

教員だけでなく、グループ同士のフィードバックを取り入れたのは、履修生同士の成長を促すためである。フィードバックは、対面よりもチャットでの記入の方がやりやすいという意見があり、効果があったと思われる。

3. 4. 3. この授業で学んだことをどのように活かすか

受講後アンケートの「将来、外国人児童生徒等教育や日本語指導に担当教員として携わってみたいと思いますか」には、25名中13名が「ぜひ携わってみたい」、11名が「機会があれば携わってみたい」と答え、関心が高いことがわかった。受講後アンケートでは以下の回答があった。

- ・授業の手順をグループごとに考えたことで日本語をどのように教えればいいのか場面ごとに様々な教授法の可能性を知ることができた。児童だけでなく、外国人で日本語に慣れていない友人にも応用して、コミュニケーションをとれるのではないかと感じた。
- ・日本語教育に直接関連する職業でないにしても、同じ職場に日本語があまり自由に使えない方がいた場合、なにか手助けができるのではないかと思います。
- ・この授業で学んだやさしい日本語の話し方、絵や実物を使った指導などは、学級に外国にルーツのある児童が在籍している場合はもちろん、発達障害のある児童、そして全ての児童の理解に役立てられると感じた。

大学生サポーターからは、外国人児童生徒だけでなく、友人、発達障害のある児童の理解に役立てられるという意見が見られ、今後の進路に活かす姿勢が見られた。

これらのことから、①児童生徒に寄り添う態度、②日本語学習・教科学習それぞれの学習目標を組み立てる力、③オンラインでのやりとりを工夫する技術の3つのねらいを概ね達成できたと言える。

4. 日本語学習支援の概要

4. 1. 実際の支援について

本授業を履修した25名中14名は、実習の履修も希望し、支援に携わった。将来の進路は、小学校教員3名、日本語教師4名、公務員1名、会社員3名、大学院進学1名、未定1名であった。

2020年10月から2021年3月まで1チーム3～5名で生徒1～2名に週3回（1回50分）の支援を行った。

日本語学習支援を行う前に、生徒と保護者に対して説明会を行い、支援の目的、内容、進め方等について理解した上で、研究協力に関する同意書に署名をもらった。

その後、大学生サポーターが中学校を訪問し、生徒と会い、自己紹介をしたり、学校の授業の様子を聞いたりする交流の機会を持った。大学生サポーターには生徒の日

本語力を把握してもらい、支援内容を考える際の参考にしてもらった。

支援は、文型積み上げ式の教科書に沿って教えるのではなく、『まるごと』（三修社）や中学校で使用されている教科書を大学生サポーターに参照用に渡し、Can-doに沿った支援を考えてもらった。生徒は、学校生活を送る中で、必要な生活言語は身に付けているので、大学生サポーターは生徒の状況に応じて、日本語や教科支援のCan-doを設定する必要がある。表5は、「日本語と教科の統合学習」のCan-doの例である。

表5 「日本語と教科の統合学習」のCan-do例

支援日	支援のCan-do
2021年1月15日	【数学】 比例と反比例のグラフが書けるようになる。
1月15日	【理科】 物質の密度について理解する。
1月21日	【地理】 ・アジア州の5つの地域の名前と場所を言うことができる。 ・アジア州で主に信仰されている4つの宗教の分布と特徴を説明できる。 ・アジア州の経済成長をグラフから読み取ることができる。
1月22日	【数学】 反比例のグラフが書けるようになる。
1月22日	【理科】 物質の状態変化について理解する。

大学生サポーターには、毎回の支援のデザインシートや教材教具の作成だけではなく、「多くの実践者にとって、常に成長を続け、学習者から信頼される教育実践者になるためのツール」（西原 2013）である評価シートを活用して、大学生サポーターが自身の支援をPDCAサイクルで振り返れるようにした。自己評価・ピア評価の項目作成は、近藤（2012）、笹栗（2017）を参考にした。「支援力評価シート」は文化審議会国語分科会（2013）を参考にした。

- ・毎回の支援内容、宿題、生徒の様子等を引き継ぐデイリーレポート
- ・支援時各回の自己評価・ピア評価
- ・約10週間ごとの支援力評価シート
- ・支援開始前、支援終了後のアンケート及びビリーフ調査

これらに加えて、週に1回程度、チームごとにメンバー3～5名と担当教員でオンラインミーティングを行い、支援内容の相談をした。

4. 2. 日本語学習支援の結果および考察

約半年にわたる支援期間中、大学生サポーターは、学んだ知識を活かして支援に取り組んでいた。支援開始時は、各自が担当する週1回の支援の流れを考えるだけで精一杯の様子だったが、支援の回数を重ねるにつれ、生徒の学習状況に合ったデザインシートが作成できるようになっていった。

支援の様子を間近で見ている中学校教員からは、肯定的な評価が得られた。「生活言語ができるので日本語支援は必要ないと言っていた生徒が、支援が進むにつれ、学習言語が身につけていないことを実感し、積極的に取り組むようになった」「通常学級で授業を受けていたときは、いつも不安そうな顔をして、内容がわからないまま板書を写していた生徒が、支援を受け始めてから、笑顔で自信を持って答えるようになり、嬉しかった」という声も聞かれた。

生徒の習熟度に応じた教科支援を行ったことで、成績が上がり、その努力が認められ、修了式のときに学年代表となって修了証を受け取った生徒もいた。大学生サポーターが寄り添ってくれたことで、支援回数を増やしてほしいという希望が出るほど生徒は支援を心待ちにしていたようである。支援が生徒の居場所、安心感や達成感を得る場所となっていたことがわかった。

2020年度の支援終了に際し、養成カリキュラムで学んだことが実際の支援において役に立ったかどうかについて、大学生サポーターにアンケートと、それに基づいて意見交換を行う座談会を実施した。大学生サポーターの率直な意見を聞くために、授業担当教員は座談会に参加せず、上級生に仕切ってもらい、意見をとりまとめてもらった。表6にアンケート結果を示す。

アンケート結果から、本養成カリキュラムの内容は実際のオンライン日本語支援を行う上でも役に立っていることがわかった。

表6 アンケート結果

設問：実際の支援を行う中で、以下の養成カリキュラムで実施した内容は、どの程度、役に立ったか（5件法、5が最高評価）	平均値
1. インタビュー・ビデオ「日本語サポーターの役割を考える①②③」	4.36
2. 「やさしい日本語・オンラインを意識した算数の授業デザイン」	4.27
3. グループディスカッションと授業デザインシートの作成	4.64
4. 授業デザインシートをもとにした実演とその準備	4.45
5. 教員からのフィードバックや受講者間での意見交換（全体を通して）	4.72

他に扱ってほしかったテーマとして、次のような声があった。

- ・算数以外に国語や他教科の授業についても学習したかった。
- ・社会や理科などやさしい日本語に言い換えられない教科の授業をどのように教えるか知りたい。
- ・漢字や文字の指導の難しさ、文章の指導の難しさという点を痛感。また、コミュニケーションアプローチ、Can-doありきの指導の中で、文法指導をどうするのかという点をもっと考えてみたい。
- ・来年度の授業では実習を履修した人のコメントとか可能なら実際の授業映像を見せると良いと思った。

さらに、自由記述で、授業内容や担当教員に対して、改善してほしいことや良かった点についても記入してもらった。

良かった点としては、

- ・支援について様々なアドバイスやサポートをしていただいたので安心して活動することができた。
- ・ピア・サポーターとして、他の方の授業を見ることにより、自身の授業案にも取り入れることができたり、我が身に置き換えて反省を促す等大変為になった。

これらの意見から担当教員による指導やピア評価を活動に取り入れたことが肯定的に受け止められていることがわかった。

改善点としては、

- ・授業準備の負担を減らすとか人によっては2週間に一度のローテーションにするとかの個々人に合わせて負担にならないような授業準備とフォローがもう少し必要かもしれないと感じた。
- ・生徒さんの日々の様子等の把握のため、支援している学校の先生方との情報共有の場をもう少し作っていただけると良いと感じた。

といった授業準備負担軽減、中学校教員との情報共有についての意見も見られた。

これらのフィードバックを元に、2021年度の養成カリキュラムでは、2020年度の支援動画とデザインシートを見てモデルを学んだ後、別の支援動画を見せ、支援デザインシートに活動内容を書き起こさせる作業を取り入れた。これにより、活動の流れをイメージし、大学生サポーターと生徒の発話・行動をより具体的に想定できるようになった。

また、実演の際には、大学生サポーターにもオブザーバーとして参加してもらい、気付いたことを話してもらった。実演での課題は「算数」だけではなく、「日本語基礎」の「誘う」「謝る」、「技能別日本語」の「比較して観察文を書くことができる」、「日本語と教科の統合学習」の「地球温暖化がどうして起こるか説明できる」という、実際の支援で扱った文型や内容を課題として提示した。

デザインシートの作成や実演を通して、やさしい日本語では言い換えられない学習語彙の導入や学校生活の場面を想定した文型導入を検討できるようにした。

「持続可能な日本語学習支援」のためには、日本語指導が必要な児童生徒に対して長期にわたって継続して支援が行える環境があることも重要である。大学生サポーターが自身の学業と両立させながら支援を行うには、他のサポーターと教具や教材を共有したり、支援内容を気軽に相談できるメンターを配置したりする必要があると考え、2021年度は、2020年度に作成したデザインシートやパワーポイントを大学生サポーター全員が共有できるようにし、支援の準備時間を軽減できるようにしている。

2020年度末に大学生サポーターに支援の感想を聞いた際、「オンライン支援であっても生徒との信頼関係の構築ができる」と言っていたことも成果であったように思わ

れる。「実際の支援を行う前までは、対面ではないと人間関係が築けないと思っていたが、実際にやってみて、方法は一つではないと感じた」と言っていたことが印象的であった。教員を目指す大学生にとって、実際の教育現場で児童生徒に長期間、携われる機会を持つことは、仕事観形成においても大きな意味を持つ。今回、茨城県教育委員会と大学が連携した取り組みで、全国的にもまだ例は少ないが、大学の「知」が地域社会の課題解決に活かされる好事例である。これまで移動手段や時間がないといった理由で支援を断念していた全国的な散在地域に、大学生によるオンラインによる日本語支援がもっと波及することを願っている。

5. 今後の展望

児童生徒にオンラインで日本語支援が行える人材を養成するカリキュラムをよりよいものとするために、今後の展望として、2点挙げる。

1点目は、養成の第一段階となる「外国人児童生徒支援研究」の履修を、日本語教師を目指す学生だけでなく学校教員を目指す学生にも呼び掛けることである。日本語教育と学校教育それぞれを専門とする学生がチームを組むことで、児童生徒に寄り添う学習支援が期待できる。今後、さまざまな専門を持つ多くの大学生サポーターを養成する体制づくりを検討し、日本語と教科の統合学習の支援を強化していきたい。

2点目は、本養成カリキュラムが大学生サポーターにどのように機能しているのかを検証するために、自己評価・ピア評価、支援力評価シート、ビリーフ、受講後アンケートの分析を行うことである。本カリキュラムの内容については、学校教員、生徒、大学生サポーター等多くの関係者の意見を集約し、改善に向けてさらに検討を重ねていきたい。また、大学生サポーターが養成カリキュラムや実際の日本語学習支援を通してどのように変容したのかについて、新たにインタビューを行い、分析したい。

参考文献

- 小池亜子・古川敦子（2019）「外国人児童生徒等の日本語指導に関するボトムアップ型教員研修—群馬県伊勢崎市の教員研修を事例として—」『日本語教育』172、88-101
- 近藤ブラウン妃美（2012）『日本語教師のための評価入門』くろしお出版
- 笹栗淳子（2017）「日本語教育実習における評価項目—中上級レベルを対象に—」『純心人文研究』23、171-186
- 中川祐治・足立祐子・内海由美子・土屋千尋・松岡洋子（2015）「外国人散在地域における『特別の教育課程』による日本語指導」『福島大学地域創造』26、49-61
- 西原鈴子（2013）「多様化する日本語教育に対応する指導力の評価について—指導力評価のためのポートフォリオをめぐる—」『大学日本語教員養成課程研究協議会論集』9、9-14

- 日本語教育学会 (2018) 『平成 29 年度文部科学省委託「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修プログラム開発事業」—報告書—』〈http://www.nkg.or.jp/pdf/2017momopro_hokoku.pdf〉 (2021 年 3 月 8 日アクセス)
- 古川敦子 (2018) 「教育実習事前指導としての「学校教育における日本語教育」—講義と演習を組み合わせた授業実践と学生の学び—」『共愛学園前橋国際大学論集』18、367-375
- 文化審議会国語分科会 (2013) 『「生活者としての外国人」に対する日本語教育における指導力評価について』〈https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/nihongo_curriculum/pdf/nouryoku_hyouka_ver2.pdf〉 (2021 年 8 月 15 日アクセス)
- 文化審議会国語分科会 (2019) 『日本語教育人材の養成・研修の在り方について (報告) 改訂版』〈https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/kokugo/kokugo_70/pdf/r1414272_04.pdf〉 (2021 年 8 月 15 日アクセス)
- 文部科学省 (2019) 『外国人児童生徒受入れの手引き』〈https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/1304668.htm〉 (2021 年 8 月 15 日アクセス)

本論文は、2021 年度日本語教育学会春季大会のポスター発表の内容をもとに執筆したものです。本誌の 2 名の査読者の方から大変有益かつ建設的なコメントをいただき、感謝いたします。また、本研究は、茨城県教育委員会グローバル・サポート事業委託研究「オンライン学習による日本語初期指導カリキュラム開発・検証に関する研究」(研究代表：筑波大学人文社会系・澤田浩子) の助成を受けて実施しています。事業に関わり、ご協力いただいたすべての皆様に感謝申し上げます。